

## 武満徹《ピアノ・ディスタンス》の分析

——構成の諸相と不確定性，ジョン・ケージからの影響——

原 墨

本論文は、武満徹（1930～1996）が 1961 年に作曲したピアノ独奏曲である《ピアノ・ディスタンス》を対象とする。同曲に関する先行研究は、ピッチクラス・セット理論を用いた分析によって、楽曲内の連関を明らかにしようと試みてきた。本論文の第 1 節では先行研究を概観し、ピッチ以外の要素に注目する必要性を示す。続く第 2 節第 1 項では、連桁と小節に注目した分析を行なうことで、同曲の構成の諸相を明らかとする。《ピアノ・ディスタンス》では、この 2 つの要素に「3, 2, 1」、あるいは「12, 6, 3」といったように周期的な減少をみせる数的な操作が認められる。さらに、この操作を詳細に検討すると、小節による大きな区分の内部に、連桁による小さな区分が折り込まれていることが分かる。また 51 小節目以降には、小節によるシンメトリカルな区分が観察される。第 2 節第 2 項では、曖昧な音価、装飾音符といった不確定性や即興性を有する要素に関する分析を行なう。《ピアノ・ディスタンス》において、これらの要素は前半部（第 1～50 小節）に多く、後半部（第 51～79 小節）では少なくなる。これらの要素の対比的な配置は、第 2 節第 1 項で検討した小節による構成の一貫性や秩序立った在り方の度合いと対応することが示される。最後に第 3 節では《ピアノ・ディスタンス》の作曲以前に書かれたジョン・ケージに関する批評的言説を検討する。それにより、同曲には不確定性の導入だけでなく、「構成的なリズム」の手法においても、ケージからの影響が認められることを明らかにする。